

保育実習（施設実習）に関する スーパービジョン体制の課題と提言

—保育を学ぶ学生の児童福祉施設に対する意識調査結果から—

大塚 良一・田中 浩二・寺田 清美・田中 利則

The problems and proposals of the super vision system about the
childcare training — Based on the investigation of the student —

Ryouichi Otsuka, Koji Tanaka, Kiyomi Terada and Toshinori Tanaka

キーワード：児童福祉施設、施設実習、スーパービジョン、専門職

1 はじめに

保育士養成校やその学生にとって、社会福祉施設実習は大きな課題であるとともにその対応については苦慮しているところが多い。たとえば、志村聡子・田畑光司（2009）「保育士資格を得るために養成校に入学してくる学生のほとんどは、保育士は保育所の先生という認識を持っていて、施設での実習が要件であることを知らないか、知っていてもそのことについて実感を持って受け止めてはいない。この点は、保育士養成を担う関係者に広く知られている課題である¹⁾」、石山貴章・安部考（2008）「保育実習は、保育所のみの実習を行えばよいとの認識を入学当初の学生は多くもっており、入学後、初めて保育士資格を取得するためには、保育所実習以外にプラスして「施設実習」を行わなくてはならないことを知る者が多い。これは、保育士資格取得のプロセスが十分に伝達されていないことと、学生自身が、自分の将来を見据えた計画ができていないなどの理由が想定される。高校訪問や講演、入試説明などで各学校を訪問するたびに、このようなシステムの内容を説明するが、まだ全体には浸透していない現状がある²⁾」、土屋由美子（2007）「ほとんどの学生にとって、保育所（園）は中学校の体験授業や、高校のボランティアで経験しているが、施設への知識は全く漠然とした思いのまま実習している状況である³⁾」などである。

これは、保育所と保育所を除く社会福祉施設の数の違いからくるものと、同時に、社会福祉施設の認知度の低さからくると考えられる。児童福祉施設は2010（平成22）年10月1日付で、31,623か所、定員が2,114,718人となっている。その中で保育所が占める割合は施設数では、21,681か所（68.6%）、定員では2,033,292人（96.1%）になっている。また、児童福祉施設の中でも、自閉症児施設は全国に5か所、肢体不自由児療護施設6か所、盲児施設9か所、ろうあ児施設10か所、情緒障害児短期治療施設37か所、児童自立支援施設は58か所と少なく⁴⁾、日常生活の中で学生が児童福祉施設を身近に感じる機会はほとんどないと考えられる。

しかし、1999（平成11）年4月の児童福祉法一部改正により、2003年（平成15）年11月から保育士が国家資格となった。これにより、社会福祉関係の資格の中では社会福祉士、

介護福祉士、精神保健福祉士と同等に位置づけられた。同時に児童福祉法第18条の4で「この法律で、保育士とは、第18条の18第1項の登録を受け、保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもつて、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者をいう」となり、児童の保育に関する専門家としての位置づけとソーシャルワーカーとしての機能が付随された。社会福祉士や介護福祉士などについては2008（平成20）年の厚生労働省「社会福祉士及び介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」実習教員の資格要件や実習指導（スーパービジョン）についても変更されている。今後、保育士に関しても同様の改革が進められると予想される。

本論では、このように国家資格として位置づけられた保育士の施設実習について、児童福祉施設の中でも特に、児童養護施設に対する認知度などについて調査し、学生の実習指導について何が必要なのかをスーパービジョンの視点から、その課題と方法を提言するものである。

2 学生調査

(1) 調査目的

保育を学ぶ4年制、短期大学の学生が児童養護施設に対してどの程度理解しているか、また、実習を経験した学生と経験していない学生とでの認識の違いについて調べることを目的とする。

(2) 調査対象

保育士養成校である4年制のY大学で保育課程を専攻している学生82名と、H短期大学保育科90名の学生を対象とする。4年制の大学では2年時に実習を経験した3年生を対象とし、短期大学では、実習をこれから経験する2年生とした。

(3) 調査期間

2010（平成22）年6月に調査用紙一斉配布、一斉回収を行う。

(4) 調査内容

調査内容については、次の6項目とする。

- ① 児童養護施設について、授業を受ける前から知っていましたか。
- ② 児童養護施設の子どもの興味がありますか。
- ③ 児童養護施設に対して、どのようなイメージをもっていますか。
- ④ 児童養護施設に就職したいと思いますか。
- ⑤ 児童養護施設に行ったことがありますか。
- ⑥ 児童養護施設で生活している子どもたちはどのような子どもだと思いますか。

※ 感じていることを記入してください

3 調査結果

(1) 児童養護施設に対する認識

保育を学ぶ学生は児童養護施設について最初に学ぶのが、社会的養護と社会的養護内容の2つの教科である。社会的養護においては、児童問題の背景、歴史、制度、法律等の理解であり知識の教授が中心となっている。また、社会的養護内容においては児童福祉施設の現況、子どもの生活、保護者の心理等を理解についてであり演習科目となっている。この2つの教科と保育実習1施設の実習指導を通して実際に施設現場実習を行うことになっている。

学生が児童養護施設について授業を受ける前から知っていたかという質問に関しては、

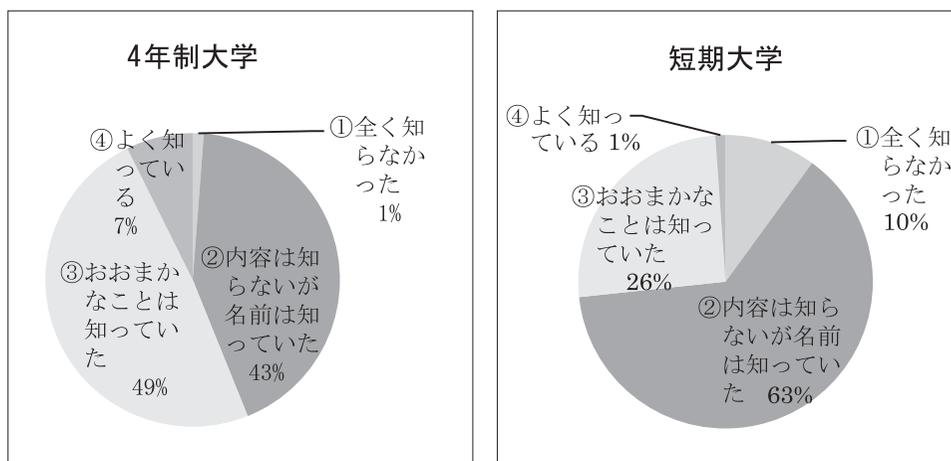


図1 児童養護施設について、授業を受ける前から知っていましたか。

図1のようになった。「全く知らなかった」は4年制の大学では1%であるが、短大では10%になっている。さらに、「内容は知らないが名前は知っていた」を含めると、大学では44%、短大では73%になっている。これは、前述した各養成校の教員が感じている通りの結果となった。短大の場合は特に、児童養護施設についてほとんど知識のない状況の中で教え、実習に向わせなければならない状況になることが理解できる。

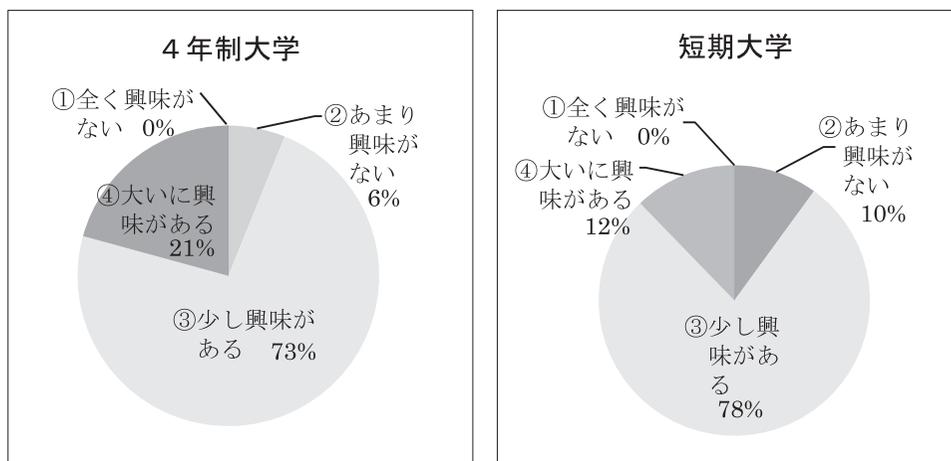


図2 児童養護施設の子どもについて興味がありますか。

また、学生が児童養護施設の子供たちに対して興味があるかとの質問に関しては「全く興味がない」という回答はなく、「大いに興味がある」が大学21%、短大で12%である。大学生の場合21人（25.6%）の学生が児童養護施設を経験しているが「大いに興味がある」5人（23.8%）とあまり実習との関係は読み取れない。

では、「児童養護施設に対してどのようなイメージを持っているのか」という質問に対し

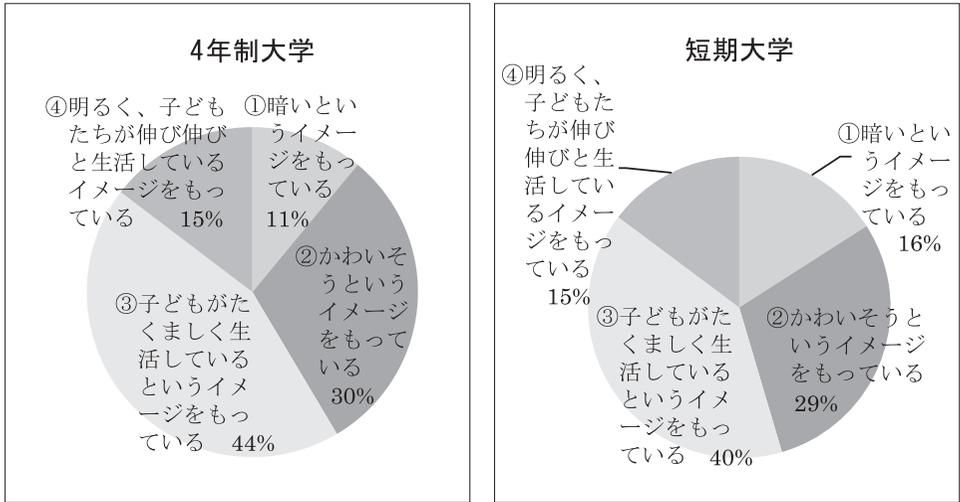


図3 児童養護施設に対して、どのようなイメージをもっていますか。

ではどのように答えているのだろうか。これについては、図3の通りである。暗い、かわいそうというマイナスイメージを持っている学生が大学で41%、短大で45%とになっており、ほとんど変わらない状況である。しかし、実際に実習を体験してきた学生については、暗いというイメージを持っている学生はなく、かわいそうというイメージを持っている学生が4人(19%)になっている。また、「子どもがたくましく生活しているというイメージをもっている」12人(57.1%)、「明るく、子どもたちが伸び伸びと生活しているイメージをもっている」5人(23.8%)である。実際に体験してきた学生の約8割がプラスのイメージとなっている。

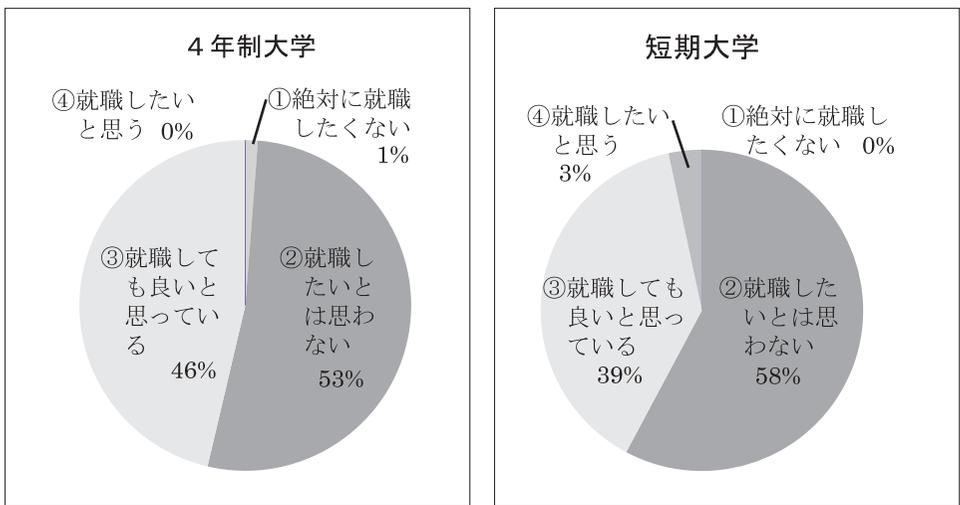


図4 児童養護施設に就職したいと思いますか。

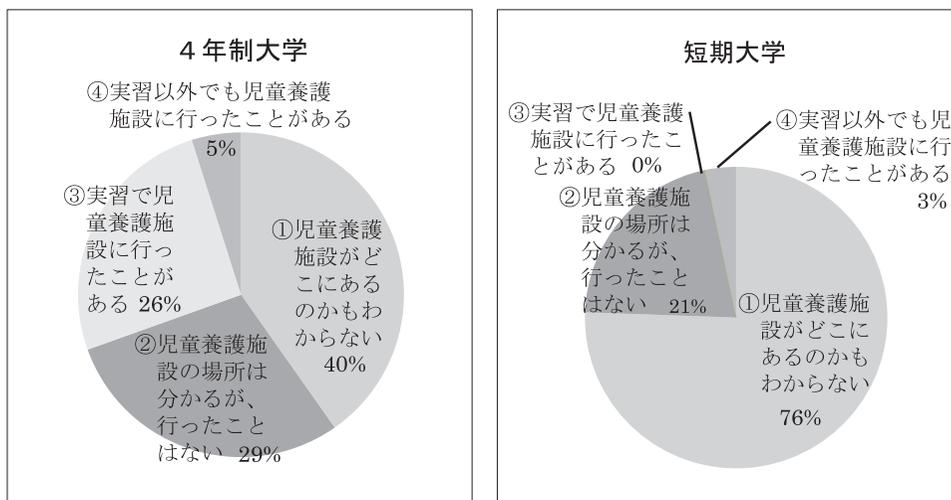


図5 児童養護施設に行ったことがありますか。

次に、児童養護施設に就職したいかという質問では、大学で1%のみであるが、「就職したいとは思わない」と明確に答えた学生が大学で53%、短大で58%になっている。実際に実習を行った学生については「就職したいとは思わない」と答えた学生は38.1%になっている。

実際に、「児童養護施設に行ったことがあるか」との質問に関しては、実習以外で児童養護施設に行ったことがあると答えた学生は大学で5%、短期大学では3%である。

児童福祉施設の中で児童養護施設は中心的存在であり社会的施設養護の中核をなしている。また、施設の数も2010（平成22）年10月1日現在で、582施設になっている。しかし、47都道府県で単純に比率をみると1つの都道府県に12.4施設しかないことになる。学生が実際に行ったことがないということが理解できる現況である。

このように、保育を学ぶ学生と言ってもその半数以上は児童養護施設に就職したいとは思ってなく、児童養護施設に関して強い関心がある学生が少ない状況で他の児童福祉施設も含め理解させ、実習に臨ませることが求められている。

(2) 実習を通しての学生の変化

今回の調査で、大きな違いがみられたのが「児童養護施設で生活している子どもたちはどのような子どもだと思いますか。※ 感じていることを記入してください」の質問である。この質問は記述式の質問であり、実習を経験した学生と経験していない学生とでは児童養護施設に対するとらえ方に大きな違いが表れた。

4年制の大学82名の中で、児童養護施設の実習を行った学生が21名いる。実習を経験していない学生と、実習を経験している学生とでは児童養護施設に対する認識の中で次のような違いがみられた。表1、表2については、実習を経験していない学生と実習を経験している学生の記述の整理番号の若い順4名について転記したものである。

実習を経験していない学生については、「思う」という記述が多く児童養護施設に関して

表1 実習を経験していない学生の記述（一部転記）

<p>A 心に傷を負っていると思う。発達障害や発達に遅れがある子が多いと思う。気持の表し方を知らない。問題行動を起こしてしまう子もいる。</p> <p>B 施設で生活している子どもも自分の家で生活している子どもも特に違いはないと思う。むしろ自分のことはなんでも自分でやれるような<u>気がする</u>。しかし、何かをきっかけに抑えることが難しくなってしまうという印象をもっている。</p> <p>C 家庭や人間関係など、何らかの点で欠陥がある子ども。でも、生活する分には一般家庭の子どもたちとなんら変わりはなく、普通に生活し楽しんだり喜んだりできる。愛情をもって職員が接すれば普通の社会に順応できると<u>思う</u>。</p> <p>D 子どもには何の責任もないのに、集団生活をしなくちゃいけない。自分を出せない、自由がない、甘えられない、独占欲が強い<u>か、逆</u>に弱い。</p>

表2 児童養護施設での実習を経験している学生（一部転記）

<p>A 2月に2週間施設実習を行ったので最初に持っていたイメージと違います。実習前は暗いというイメージがありましたが、実際には子どもたちは自分の状況を良くわかっていてとても楽しそうに生活して<u>いました</u>。しかし、発達の遅れは目立って<u>いました</u>。保育所の幼児とは明らかに<u>違う点もあり驚きました</u>。</p> <p>B 実習前は暗い子・表情が乏しい・暴力的などと思っていたが実際に実習に行ってみると<u>普通の子と変わらないのだ</u>と思った。他の子よりできることが多く、下の子の面倒見が良いなど、良い面もあることを<u>知った</u>。</p> <p>C 実習で児童養護施設に行き、実習が始まるまでは、暗くて子どもたちは少しぐれているようなイメージを持っていました。しかし、実際には子どもたちと関わると、子どもたちは明るく元気で初めのイメージと全く違っていました。</p> <p>D 私は実習で児童養護施設に行ったことがあり、実際にその子どもたちと関わったことがあるが、子どもたちは<u>明るい子どもが多かった</u>。また、生活する上でのことはだいたい自分でやるのだが、中には実習生に甘えてくれる子もけっこういてやはり親からの愛情をあまり受けていない子が多いのかなと<u>思った</u>。</p>
--

漠然としたイメージでとらえているが、実習を経験している学生では現況をしっかりとつかんでいることが分かる。これにより、学生が実習を通して多くのことを経験したことが理解できる。

4 スーパービジョンと施設実習

スーパービジョンはアメリカ COS（慈善組織化協会）のワーカーのためのトレーニング訓練にその源流をみることができる。その後、イギリスに伝わり、イギリスでは「1940年代末期での最初の動きは、主としてアーモナー協会（Institute of Amoners）と精神科ソーシャルワーカー協会（APSW）が主催した、スーパーバイザーのための夏期スクールやセミナーであった⁵⁾」とし、ここでスーパービジョン研修が行われている。さらに、「1960年代に入

るとスーパービジョンは1950年代での苦闘を克服し、今やいたるところで求められるようになった⁶⁾」とされている。

日本でのスーパービジョンの導入はどのようだろう。大塚達雄などによるスーパービジョンの研究では「我が国にスーパービジョンの概念が本格的に導入されたのは戦後のことであった。当初スーパーバイザーとは福祉事務所における査察指導員のことであった。それ以来、社会福祉実践におけるスーパービジョンの重要性は徐々に認識されるようになり、スーパービジョンが様々な形で行われるようになった。しかしながら実際の用語としてのスーパービジョンのみが独り歩きし、その内容は極めて曖昧なものであるといわざるを得ない⁷⁾」とある。

また、蟻塚昌克も「わが国の福祉事務所組織は木村が訪米した時点でのアメリカのそれをそのままコピーしたもので、指導監督を行う職員は Super Vising Caseworker 現業員は Case Worker とされた。社会福祉法施行にともなってケースワーカー、そしてやがてワーカーと略されることとなった。今日でも指導監督にあたる職員を略してSVと呼ぶことがある。半世紀以上前のアメリカの母斑が残っているのである。しかし、法律による本格的なソーシャルワーカー教育の開始は、1987(昭和62)年の社会福祉士及び介護福祉士の誕生を待たなければならなかった⁸⁾」と述べている。

では、スーパービジョンとはどのようなものなのか。また学生に対して現場指導を行う場合何が大切になるのかをブーバーの中にもみることにする。ブーバーは、「主観が我から分離するのを観察しながら追求することによって、主観の本質を説明している。はじめに人間の世界の二重性を示して、この分離を公式化している。人間が主観として投影に向かうか、そ

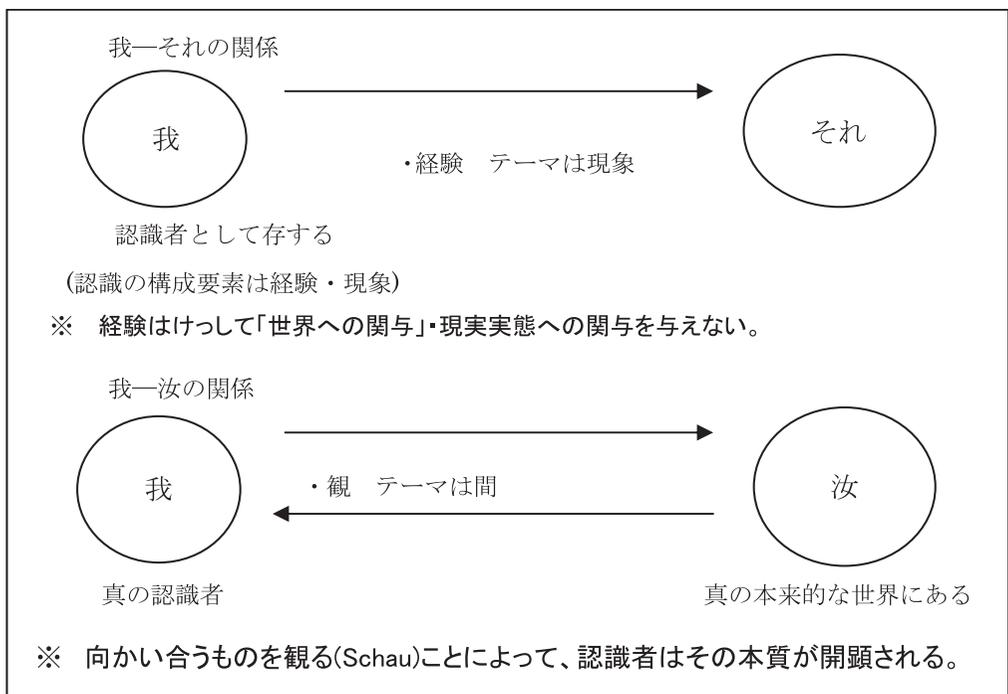


図6 ブーバーの「我とそれ」、「我と汝」の関係 (ツォルタン・パロー著野口恒樹・植村亘共訳「ブーバーにおける人間の研究」北樹出版. 1983年から筆者作成)

れとも生き生きとした我における十全の全体的人間として自己の外にある実存的存在者と関係に入るか、そのどちらかによって人間は両基本語我一汝・我一それのいずれか一方を語るのである。基本語我一それの我は単なる主観である⁹⁾」と述べている。

さらに、「われわれが、人間とは何か、という問に対する答えに近づくことができるのは、われわれが人間を、対話において、すなわち相互に現に居る二人居 (Zu-zweien-sein) において、或る人と他の一人の人との出会いがそのつど実現され認識されるような存在である、と了解するときである¹⁰⁾」「対話的思考の歴史の概説で、われわれ現代人に対話的実存の展望が、どのようにして開かれたのかを示している。このような展望にわれわれが歩み入る作用は、もはや悟性的「認識」ではない。この認識には空間的・時間的直観の制限がつけられている¹¹⁾」と述べている。スーパービジョンの関係は我とそれの主観を持った関係から、対話的方法を持って自らの認識 (ブーバーは「真の認識者」と表現している) にしていくものと理解できる。

このことから、施設実習で多くの経験 (主観を持つ) をした学生とスーパーバイザーが対話をするにより、学生が自らの認識ができと考えられる。

5 施設実習におけるスーパービジョンの方法

スーパービジョンの役割とはなんなのか、大塚達雄は「スーパービジョンはワーカーの知識・技術を向上させるだけではない。より優れた知識、技能、及び経験を持つスーパーバイザー (supervisor) によるスーパービジョンが、ワーカーの自己覚知に重要な役割を担っている¹²⁾」と述べている。この自己覚知はブーバーの言う「認識者はその本質が開顕される」というものと近いものがあると考えられる。

また、カウンセリングの視点でロジャースは「存在するものの生き方に干渉することは、彼らをも自分自身をも傷つけることを意味している。自分を押し付ける人間は、小さな明確な力を所有している。自分を押し付けようとしぬ人間は、大きな秘めた力を所有している¹³⁾」と述べている。あらゆる現象の中で自ら考えその本質を見つけていくことがスーパービジョンの役割であると考えられる。ここで大切となるのが、「なぜ、そのようなことになっているのか」という問いかけであり、それがスーパーバイザーの役割であると考えられる。

前述の通り、ほとんどの学生は初めて児童養護施設の仕事を体験する。施設の実習担当者からの指導により、日常業務について学ぶ。また、同時に、施設利用者の生活を垣間見ることになる。この状態はブーバーの言う経験をした認識者であり、我とそれの関係である。

表3 児童養護施設での実習を経験している学生 A

A 2月に2週間施設実習を行ったので最初に持っていたイメージと違います。実習前は暗いというイメージがありましたが、実際には子どもたちは自分の状況を良くわかっていてとても楽しそうに生活していました。しかし、発達の遅れは目立っていました。保育所の幼児とは明らかに違う点もあり驚きました。

表3の「児童養護施設での実習を経験している学生 A」の意見をみると、下線部分の「子どもたちは自分の状況を良くわかっていて」「発達の遅れは目立っていました」「保育所の幼

児とは明らかに違う点もあり」など、経験により得た知識があることが理解できる。これを確かなものにする問いかけとして。「なぜ」子どもたちは自分の状況を良くわかっているのか。「なぜ」発達の遅れがあるのか。「なぜ」保育所の幼児と違うのかを投げかけ、それについての答えを自分で見つけていくことが必要となってくる。

たとえば、「なぜ」子どもたちは自分の状況を良くわかっているのかとの問いに対しては、「施設利用に関して、児童相談所から適切な説明がされているため」「自分の状況を知ることへの精神的影響はないのか」「自分の状況、過去の話をしてきたときにどう対応したら良いか」などの問題が含まれている。また、「発達の遅れは目立っていました」とのことに対しても、なぜ発達の遅れがあるのか、「虐待のために発達の遅れがあるのか」「発達の遅れがある子どもが増えているのか（発達障害なのか、知的障害なのか）」「発達の遅れがある子に対して、どう対応したらよいのか」などの問題が含まれている。

また、保育所の幼児と明らかに違うという言葉に対しても、どこが違うのかを確かなものとしていく必要がある。たとえば、「甘えが多いのか」「親がいない、施設に生活するとはどういうことなのか」「甘えなどの感情に対してどう対応したら良いのか」など、この言葉の中に含まれている。これらのことについて対話を通して確かなものにしていく作業がスーパービジョンであると考えられる。

表4 児童養護施設での実習を経験している学生B

B 実習前は暗い子・表情が乏しい・暴力的などと思っていたが実際に実習に行ってみると普通の子と変わらないのだと思った。他の子よりできることが多く、下の子の面倒見が良いなど、良い面もあることを知った。
--

同様に、表4の「児童養護施設での実習を経験している学生B」の意見をみると、普通の子と変わらないという意見を出している。実際に実習を経験した学生のうちこの「普通の子と変わらない」と表現している意見は5人（24%）ほどであった。これらの学生は「実習に行くまでは、虐待されている子どもがいるからかわいそうと思っていた」「実習前は暗い子・表情が乏しい・暴力的などと思っていた」「子どもたちは私が想像していたものと違い」など、児童養護施設での現況について授業を通して学んだことに対して、そのイメージが違ったことを述べている。社会的養護や社会的養護内容の授業の中では、虐待を受けた子ども達の状況を伝えるために、虐待を受けた子どもの「ためし行動」や、その心理状況について授業の中で展開する。しかし、そのケースについては「典型」の「典型」であることを理解する必要がある。

また、「他の子よりできることが多く、下の子の面倒見が良いなど、良い面もある」は反対に一つの典型を児童養護施設の子どものとして捉えていないか、「面倒見が良いことが良い面なのか」などを問い直すことで、そこに含まれている子どもの生活歴について考えるきっかけとなる。これらのことが、利用者に対する学生の見方をより深いものへと変化していくと考えられる。

6 おわりに

保育士を目指す学生の多くは、アンケート調査でも理解できるように児童福祉施設について興味・関心が薄い中で、短期大学の場合は1年後に実習に入る。その間、保育所、幼稚園実習などもあり、自ら就職したいと思う保育所、幼稚園に関しての興味・関心は高くなっていく。一方、児童福祉施設実習に関しては、児童福祉施設を身近に感じられず、実習を終了させることが目的となってしまっている学生もみられる。実習指導について、保育実習Ⅰ施設実習指導と社会福祉関係の授業で行っているが、多くの学生は、その実態がつかめず、戸惑いや不安の中で施設実習に臨んでいることが予想される。

しかし、実習を経験した学生は児童福祉施設に関して、ブーバーの言う「主観」を持って戻ってくる。この主観を「自らの認識(体験)」としてそれぞれの現場で活用できるようにすることは、幼児教育を行う者にとっても大切な資質であり、財産でもある。そのためにはスーパービジョンが大切な役割を持つと考える。スーパービジョンについて児童養護施設パッドホーム園長の宮本和武は「学校に対して批判的だった私が、スーパービジョンを受けるなかで、現場を踏まえての理論ではないものが自分の中にあること、特に一人の子供に即応した関わりを支える力となるようなものが自分に欠けている。それではいけないんだな、現場を踏まえた上で理論を組み立てていかなければならないんだな、と考えさせられました¹⁴⁾」といている。子どもに関する広い見識を持った保育士の育成には、より深く子どもを捉えることができ、また、自らの生き方と照らして考えられる思考態度が必要である。それには、自らの意見を突き詰めていくスーパービジョンの役割が不可欠である。

保育士の役割については、2001(平成13)年の児童福祉法一部改正で保育士の資格規定が新たに法律で定められ、保育士は「保育」及び「保育に関する保護者に対する指導」を行うこととなり、保育に関する様々な保護者支援等のソーシャルワーク的機能をもつ役割となった。さらに、国家資格となり、子どもに対する専門家として位置付けられたと考えられる。この方向に基づいた、スーパービジョンの体制を築いていくことが各養成機関に求められていると考えられる。

E・グリーンウッドは専門職養成機関について「専門職の教育機関は、新人を専門職文化にはじめて、また、だんだんにふれさせていくことを通して、検査していく場面になっている¹⁵⁾」といている。この検査がスーパービジョンであると考えられる。また、そのためには、実習指導者の資格要件、実習巡回指導時、実習終了後のスーパービジョンの体制とその記録の整備などが課題として挙げられる。

引用・参考文献

- 1) 志村聡子・田畑光司「保育士養成課程における実習事前事後指導—初めての「施設実習」に向けた動機形成への取り組み—」埼玉学園大学紀要人間学部篇9, 2009年, 305頁。
- 2) 石山貴章・安部考「保育士養成機関における「施設実習」の現状と課題(I)—短期大学「施設実習」に向けた事前指導を通して—」九州ルーテル学院大学紀要2008年, 157頁。
- 3) 土屋由美子「保育実習に関する意欲と現状について: 学生のアンケートを中心に」中国学園紀要6, 2007年, 167頁。
- 4) 厚生労働省「平成22年社会福祉施設等調査」<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/fukushi/10/dl/kekka-sisetu1.pdf>2011年12月27日確認。
- 5) E.L. ヤングハズバンド著本出祐之監訳『英国ソーシャルワーク史-1950～1975年(下)』誠

- 心書房 1986年 .58頁。
- 6) 前掲 .5p63。
 - 7) 大塚達雄・井垣章二・沢田健太郎・山辺朗子編『ソーシャルケースワーク論』ミネルヴァ書房 1994年 .190頁。
 - 8) 蟻塚昌克『証言 日本の社会福祉 1920-2008』ミネルヴァ書房 2009年 .77頁。
 - 9) ツォルタン・パロー著野口恒樹・植村亘共訳「ブーバーにおける人間の研究」北樹出版. 1983年 .46頁。
 - 10) 前掲 .93頁。
 - 11) 前掲 .77頁。
 - 12) 大塚達雄、井岡勉、木内正一「社会福祉の専門技術」ミネルヴァ書房 1975年 .180頁。
 - 13) カール・R. ロジャーズ (著), Carl R. Rogers (原著), 畠瀬 直子 (翻訳)『人間尊重の心理学 一わが人生と思想を語る』創元社 1984年 .12頁。
 - 14) 松本栄二鈴木五郎編『福祉施設が求める専門職者』東京書籍 1986年 .64頁～65頁。
 - 15) E・グリーンウッド「専門職の属性」ワインバーガー編小松源之助訳『現代アメリカの社会福祉論』ミネルヴァ書房 1978年 .346頁。